

知の拠点【すぐわかアカデミア。】

すぐにわかる「ドラッグ」をめぐる社会運動

地域研究で読み解くインドネシアのハーム・リダクション

京都大学東南アジア地域研究研究所 (CSEAS)

准教授 山田 千佳

みなさん、こんにちは。京都大学東南アジア地域研究研究所 (CSEAS) の山田千佳です。私は公衆衛生と地域研究を専門としています。今日は、「ドラッグ」をめぐる社会運動についてご紹介します。特に、インドネシアの「ハーム・リダクション」と呼ばれる事象について、地域研究の立場から読み解きます。

この動画の要点

はじめに、この動画でお伝えする要点をご紹介します。「ハーム・リダクション」とは、ドラッグを使用する人たち自身が、自分たちを守るために行っていた実践が、HIV・エイズの危機をきっかけに、公衆衛生モデルとして採用され、現在では、様々な社会運動の基盤となっているもののことです。

そのハーム・リダクションが、インドネシアという独自の文脈がある地域に展開される時、何が起こってきたのでしょうか。

今日は、「外来モデルの現地化」「独自の表現」「在来知の再評価」という3点に触れ、世界との共通性がありつつも、地域の文脈の中で実践が形づくられていることをご紹介します。

ハーム・リダクション (harm reduction, 害の低減) とは？

みなさんは、「ハーム・リダクション」という言葉を聞かれたことはありますか？ ハーム・リダクションとは、ドラッグの使用をやめさせることを目的とするのではなく、その使用によって生じている健康上、社会上、

そして法律上の害を、できるだけ小さく抑えることを目指す、実践や政策の総称である、と言われたりします。

まず、ここでいう「ドラッグ」とは、何でしょう？ それは、精神への作用があつて、依存性があるとされ、その栽培や製造、流通、所持などが法律で制限されている物質を指します。世界にはこうした制限を取り決めた国際条約が3つあります。多くの国では、これらの条約に基づいた法律が作られ、使用や所持も処罰の対象になっています。そのため、ハーム・リダクションは、「違法」とされる行為をしている人たちの命を守る政策という側面を持っています。

ハーム・リダクションの実践例

これらは、世界のさまざまなハーム・リダクションの実践例です。例えば、左端は、「注射器交換プログラム」といって、病気の感染を予防するために、ドラッグを使う人に清潔な注射器を配布し、また使用済みのものを回収する取り組みです。このほかにも様々な取り組みがあります。

ハーム・リダクションの誕生

ハーム・リダクションの起源は、1970年代のオランダ・ロッテルダムなどで、ドラッグを使用する人たち自身が、自分たちを守るために始めた取り組みだと言われています。彼らの間で、より安全にドラッグを使う知識と実践が蓄積されていきました。

使用者の団体を立ち上げたニコ・アドリアーンさんは、情報誌の中で、「自分たちの生き方を、もはや精神科医、役人、福祉関係者などに決められないようにする」、「自治体や役所、警察の措置には反対」といった言葉をつづっています。

その後、大きな転機となったのは、HIV 感染の世界的な拡大でした。当時はまだ有効な治療法がなく、感染すればほとんどの人がエイズを発症し、命を落としました。注射針の共有によって、ドラッグを使用する人々の間にも感染は急速に広がっていきます。

この事態に、公衆衛生の専門家だけで立ち向かうことはできませんでした。ドラッグを使用する人たち自身の知識と参加が、欠かせなかったのです。

東南アジアのドラッグに関する政策の特徴

では、東南アジアでのハーム・リダクションの展開はどうなっているでしょう？ 左側の地図は、先ほどご紹介した「注射器交換プログラム」の提供状況を国別に示したものです。黄色の丸で囲んだ、東南アジアでは、ほとんどの国で、提供されています。

では、東南アジアはドラッグに関する規制がゆるいのでしょうか？ そんなことはありません。東南アジア諸国は、ドラッグに対して非常に厳しい政策をとる地域として知られており、例えば、ドラッグ関連犯罪による死刑判決数の上位9か国のうち6か国が東南アジアの国です。

つまり、そこに見られる特徴は、「厳罰の中にある寛容さ」です。私は、その実態や背景を知りたいと思い、インドネシアで調査を進めています。

インドネシアで出会ったハーム・リダクション

インドネシアでは、1990年代終盤、ヘロインを使う人々の間でエイズが広がりました。その危機への対応として、当事者やその友人たちが自ら注射針の配布を始め、国際ドナーからの資金や技術援助を経て、保健省の政策としても採用されます。

近年では、アンフェタミン系覚醒剤に対するハーム・リダクション活動を、地元のNGOが開始しました。これは世界で初めての事例として、国際的にも注目を集めました。

その一方で、ドラッグの使用者が、公衆衛生プログラムの数値目標とか見なされないという状況も生じており、現場の人が、「ハーム・リダクションは死んだ」と言われることもあります。

一方、私が特に驚いたのは、ドラッグを使う人々の団体があり、その団体の代表者が国会で証言していたことです。そんな日本では考えられな

い状況が、インドネシアではどうやって可能になったのでしょうか。調査のために、ハーム・リダクションやそれに関連する現地の活動に参加させてもらっています。

外来モデルの現地化：首都ジャカルタにおけるハーム・リダクションの草分け

首都ジャカルタにおけるハーム・リダクションの草分け的存在、Sahrul Syah さん、通称 Gogon（ゴゴン）さん。そのお話を、どのような経験が現地の実践を形づくってきたのかを見ていきます。

Gogon さんは高校時代、ギャンググループに所属していました。この経験から、ストリートでの権力関係の中をうまく立ち回る術を身につけます。のちに、こうした術がドラッグを使う人たちへのアウトリーチ活動にも役立つことになります。

また、Gogon さんは子供のころから、大の冒険好きで、自転車で 70km を探検するほど。大学時代には、クラシックバイクにはまり、友人とツーリングをする中で、仲間との連帯することの大切さを学びます。1人のバイクが故障すると、全員が止まって、助け合って修理をした経験からです。のちに、Gogon さんはロードカルチャーとハーム・リダクションの実践を融合させていきます。

例えば、ドラッグ使用者が経済的に自立でき、自信をもつことができるよう、彼らによるバイク洗車のビジネスを立ち上げ。さらに、ドラッグを使用する友人や HIVとともに生きる友人たちと、各地をめぐるツーリング旅をしたり。このように、Gogon さんは、自分たちの経験を織り込む形で、ハーム・リダクションを現地化していったのです。

独自の表現：アートを通じてドラッグ、そして様々な社会問題について表現し続ける

アートを通して、ドラッグを含む様々な社会問題について、独自の表現を実践し続けている Edo Wallad（エド・ワラド）さん。「世界は詩で出来ている」と言う Edo さんは、90 年代後半以降、現在に至るまでバンドのボーカリストや DJ として活躍しています。そんな彼にとって、ドラッグは学

生時代から身近な存在です。

ディスコへの規制が厳しくなった 2007 年には、それに抗議する楽曲を制作。また、ドラッグ使用者のための雑誌を編集した際には、特集で「ドラッグ使用者を刑務所に送る必要はあるのか？」と問い合わせました。オリジナルの詩集では、死ぬこととナイトライフをテーマに。近年はアート展を主催し、ドラッグを含む社会的包摂の課題について発信しています。

アートにはどのような可能性があると Edo さんは考えているでしょうか。路上でのデモンストレーションは社会を変えるために重要ですが、それだけでは普段から関心のある人にしか声が届きません。さらに、法律や公衆衛生の言葉だけでは、人間の感情や経験の複雑さは伝えきれません。その一方で、アートは多様な人々を惹きつけ、ニュアンスを感じ取ってもらうことができます。

Edo さんのアート実践には、ハーム・リダクションへの批判も含まれています。ハーム・リダクションが時に、ドラッグ使用者を感情を持った人間として見ず、彼らの痛みや苦しみを無機質な数字に還元してしまう場面を、目の当たりにしてきた彼の経験に基づくものです。

在来知の再評価：歴史を組み立て直し、ドラッグという概念自体を揺さぶる

歴史を組み立て直す実践について、大麻の事例から見てみましょう。

大麻に関する社会運動は、その使用者の逮捕が増えたことへの抵抗として盛んになりました。その中で、インドネシアにおける大麻の歴史を、本やコミックで紹介する取り組みが行われています。そこでは、大麻が長らく人々の生活に根付いていたことが描かれています。

例えば、7世紀から儀礼などに使われてきた短剣の「クリス」。その柄（つか）と刀をつなぐ部分は大麻を意味する「ガンジャ」と呼ばれ、特別な力を持つとされています。17世紀の博物学者ルンフィウスは植物図鑑の中で、現在のインドネシアの東部にあたるモルッカ諸島の人々が大麻を治療や想像力を高める目的に使っていたことを記録しました。

本の中では、こうした歴史を踏まえつつ、インドネシアが国際条約を批

准し、大麻の全面禁止へ進んだことを批判します。祖先から子孫への知識の断絶を問題とみなし、大麻の産業化や医療化への単純な追随にも警鐘を鳴らします。これは、多国籍企業の利益にはつながっても、祖先とのつながりを取り戻すことにはならないのではないか——という問いかけです。

彼らからこうした議論を学ぶ中で、私は、地域比較にも関心を持つようになりました。南米ペルーでは国際条約に批准しつつも、アンデスやアマゾンの先住民文化であるコカの葉の利用を一部保護しています。右下の写真は、コカの葉を嗜みながら伝統舞踊をする若者たちです。

大麻利用を全面禁止したインドネシアと、コカ利用を部分的に保護するペルー。植民地化された歴史を持つ両国に、なぜこの違いが生まれたのでしょうか。

この比較に興味を持ったきっかけは、同じ研究所でラテンアメリカ地域研究をされている村上勇介教授と文化人類学を専門とする石川登教授のペルー調査に同行する機会をいただいたことでした。

おわりに：地域の文脈に基づいた「ドラッグ」使用者らを中心とする実践

ここまで、「ドラッグ」をめぐる社会運動を見てきました。その中心にあつたのは、「ドラッグ」についての知識体系を使用者やその友人たちが問い合わせ直すというものでした。

インドネシアでの実態をみると、様々な専門分野の枠組みで指摘されてきた事象との共通性もあれば、地域固有の文脈に根ざした鮮やかな実践もありました。特に草の根の実践は、公式な記録に残りにくいため、その記憶を残そうとデジタル・アーカイブの制作にも取り組んでいます。

以上で、私のお話を終わります。少しでも、分野を超えて地域の実態を理解しようとする地域研究の魅力を感じていただけたら嬉しいです。(了)